IC たより

（社）国際 IC 日本協会機関紙

一人ひとりのチェンジで信頼を築く

Initiatives of Change Japan

発行年月日　2011 年 10 月 3 日
発行所　（社）国際 IC 日本協会
〒 156-0055　東京都世田谷区船橋 1-54-14
TEL：03-5429-1156　FAX：03-5429-1157
E-Mail：info@jp.iofc.org
HP：www.jp.iofc.org

頒価　1 部 100 円

10

◇ 目 次 ◇

学校訪問報告
東北アジア青年フォーラム
IC 国際フォーラム
スイス・コ
APYC
東日本大震災義援金報告



学校訪問 2011

今年来日した IC の国際ボランティアであるディエゴ（ブラジル）、ダワ（チベット）、ウマム（インドネシア）、ヒジン（韓国）の 4 名は、日本各地の学校等を訪れ、若い人たちと直に触れ合い、勇気を与えるとともに子供たちからもパワーをもらった様子などを率直なメッセージにしてくれました。



「北九州の小学校ではみな、インドネシアについて非常に事前学習をしていて、鋭い質問をしてきてくれたことが忘れられません。また、ホームステイでは、夕食の時などに日本とインドネシアの第 2 次世界大戦の頃の歴史や、家族のことなどを話すことができ、ホストファミリーとのつながりを強く感じ、大切な新しい家族ができたようでした」





「日本に到着してすぐ、日本に来て良かったと感じました。来日する前は原発の脅威がある中で、自分が来るべきか確信が持てなかったからです。でもそれから 2 ヶ月間日本で活動していくうちに自分が日本に来る選択をしたことが間違っていなかったと確信しました」



「東京そして小田原の小学校へと学校訪問をスタートし、交流を重ねていくうちに私たちは日に日に手ごたえを感じるようになりました。また日本各地を周り日本の文化、社会、さらに歴史をも学ぶ機会が持てたことは大きな経験となりました」



2011 年訪問校：〈つくば市〉上郷小〈東京・横浜〉啓明学園（高等・初等・幼稚園）、国際基督教大学、沓掛小、一橋大学、桐蔭横浜大学〈小田原〉大窪小、三の丸小、東富水小、芦子小、千代小、国府津小〈北九州・福岡〉板櫃中学、中央高等学園、菊陵中学、小倉中央小、日明小、精華女子短大、水城小、ILP 御茶の水医療福祉専門学校、中村学園大〈広島〉広島修道大〈岐阜〉在日ブラジル人学校 Hiro 学園（以上 23 校）

第8回　東北亞 青少年　FORUM

東北アジア青年フォーラム 2011

「社会を発展させるための青年の役割」

를 通한 社會發展에 寄與

期間: 2011. 8. 3 ~ 8

主催: MRA MRA/IC韓國本部　　後援: 女性家族部



2004 年から日中韓の大学生を対象として開催されてきた東北アジア青年フォーラム（韓国 MRA/IC 協会主催）に今年は日本から 23 名の学生が参加しました。グループディスカッションや楽しいレクリエーションの時間、各国の文化紹介での率直な感想や思い出を一言ずつ寄せてくれました。



▲ Team Japan

“ 一生の友達 ”

「一生よろしく」素直にそう言える仲間たちと出会えたことが、今回のフォーラムで得た私の財産です。（筑波大学大学院 1 年）　私達自身の友情は政府の問題とは関係なく一生続いていく、という話になり、共に部屋で泣きました。つたない英語でも必死に伝えあった思いがお互いへの強い絆へと変わったのだと思います。かけがえのない時間でした。（武蔵大学 4 年）

“ 交流・コミュニケーションの重要性 ”

現代の若者は実際に時間をかけて皆で話し合う事、他者への気配り・配慮がおろそかになりがちな傾向にあるという事に気づかされました。（日本大学大学院 1 年）　毎日、研究室で化学の実験に明け暮れているため、他国のこと、青年交流や社会発展について考える時間はありませんでした。このフォーラムを通じて、日本、中国、韓国の学生たちがどのような考えをもっているか知ることができました。（上智大学大学院 1 年）



▲文化体験にて浴衣を着こなす韓国の青年達と



▲国立中央青少年修練院



▲浴衣ガールズ





◀▲閉会式・夕食会

“ 自分にとってのチャレンジ、そしてチェンジ ”

日本人同士の参加者たちともたくさんの交流を図ることができてとても刺激的でした。自分自身の未熟さを思い知ると同時に私もこの人たちのようにと意欲を掻き立てられました。（東海大学 1 年）　今回のように大人数、長時間で、しかも国籍もばらばらな聴衆に語りかけることは、私にとって大きなチャレンジでしたが、発表後、「共感できた」「よかった」などと声をかけられ、予想以上に好評に終わりほっとしました。（一橋大学 2 年）　1 番大きかったのはメディアではなく直接肌で感じたことでした。自分は偏見を持っていたのだと思い知らされました。直接話してみればお互い 1 人の人間として話したり笑ったり遊んだりすることができます。そこに歴史や民族の問題は全く存在しません。世界が広がる、価値観が変わるという感覚をここまで鮮明に感じられたのは今回が初めてで、自分の中で何かがはじけたような気がしました。（明治大学 1 年）

“ よりよい国際関係のために ”

平和な世界を作るためには友人を作ること、そして、友人の輪を広げていく事が大切だと強く感じる様になりました。偏見を払拭する唯一の方法が国際交流だと感じました。ここでの友人の輪を自分達だけで留めず、更に広げていくという活動を通して、私なりに平和に貢献していきたいです。（津田塾大学 4 年）　社会貢献の第一歩として私はこのフォーラムの存在と、ここで実感したことを国際交流サークルのメンバーに伝えようと思いました。（成蹊大学 1 年）　青年の関わりを増進する小さな原動力として、民間の外交官、あるいは学生の外交官として、自分にできることを今後も積極的に行っていきたいと思う。（中央大学大学院 1 年）

IC 国際フォーラム 2011



『●のミッション』　ツルネン・マルティ氏が語る

～フィンランド出身のツルネン・マルティ氏は、1967 年教会の宣教師として来日。流暢な日本語で自らのストーリーを語る～



宣教師を辞任して日本に帰化、日本人として一般の人として暮らしたいという望みを日本人の奥様とともに実現してきた。やがて、「ツルの恩返し」といって、しがらみのない政治家として日本社会への貢献を目指す。その後４回もの落選にくじけず、2002 年日本の憲政史上初めてという「外国で生まれ育った日本の国会議員」が誕生した。奥様との二人三脚でこの志を果たす事が出来たと言う。議員となり驚き感服した事は仕事の多忙さ、がっかりしたことは本会議の「くだらない野次」、選挙での他の候補のあら捜し、「本音と建前の区別が分かりにくい」など…。あらゆる国難を乗り越えて 2007 年には「有機の人」で２期目当選。

日本が世界で果たすべき役割は、市場原理主義一辺倒から環境立国への変革、率先して脱原発の実現と再生可能エネルギーの促進を行うべきと説く。ツルネン氏は日本の将来を大地震、原発事故の厳しい試練を受けた後、自然に従う道に戻ると予言する。にこやかに笑みを絶やさない奥様と伴に力強く日本の未来を語ってくれた。

『パネルディスカッション』　違いを乗り越えて



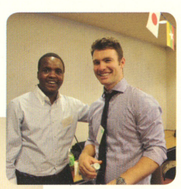
日本、スリランカ、バングラディッシュ、ミャンマー出身のパネリスト４名を迎えて、〝違いを乗り越えて〟というテーマで各々の経験を語っていただいた。

国際民宿を経営しています。始めた頃は文化の違いに戸惑い、止めようと思ったこともあったが、相手の違いを受け入れる大切さに気づいた。今後も草の根レベルの観光交流を通じて国際平和に貢献していきたい。夢は大きく、視野広く、見識高く、思慮深く。（高橋正美　日本）

人生はそんなに甘いものではないということに気づけたのが日本。様々なことを教えてくれて、大切な仲間もたくさんできました。私が子供達を通じて普段感じる事は、子供を持っている親の皆さんは、もっと家にウェルカムして下さい。子供たちのために頑張ってみましょうよ。（カピラ・バンダラ　スリランカ）

日本は先進国でとても豊かな国。留学、そして就職というキャリアを日本で重ねてきた経験の中で感じることは、ハングリー精神を忘れないで欲しい。「しょうがないですね」の一言で片付けるのではなく、口に出して相手に伝えて欲しい。（桜井ジャヘッド　バングラディッシュ）

私はミャンマーの民主化運動を通じて、辛い経験をたくさんしてきました。政府と和解し帰国した時に気づき、私は考え方を変えました。多くの日本人の皆さんに助けていただいて、その恩返しをしたいという気持ちでいっぱい。（ミャミャ・ウィン　ミャンマー）








スイス・コー会議に参加して

柴田　節子（通訳者）



▲柴田節子さん（２列目左から２人目）

今年のコー会議はディアスポラ（ユダヤ移民、広く移民問題）という日本人にはあまり馴染みのないセッションに参加をしたので、難しいのかなと思っていましたが、とても感銘を受けました。全体会議では欧州各国における移民と受入国の深刻な状況を聞くことができました。日本でもアジアの移民の人たちの問題がないわけではありませんが、普段あまり考えることもなかったので、とても刺激になり勉強になりました。特にロマ（いわゆるジプシーと呼ばれている人たち）の背景や現在の生活状況、そして欧州各国における回教徒の人たちに対する差別、欧州に移民しているアフリカの人たちの自国の問題等々、日本の新聞ではほとんど報道されない話を聞きました。コーの会議に出ると、IC の活動は世界的な活動で、日本だけのことを考えていてはいけないと思い知らされます。

このほかコミュニティミーティングでは、全体会議で聞いたことをグループに分かれて話し合い、解決案を模索しました。ラーニングトラックでは、参加者が関心のあるテーマのグループに参加する研修型のプログラムが毎日行われました。私は他の日本人の方と一緒に "Trust-building and honest communication" というそれに参加しました。正直な対話を推進していくための技術を学ぶ中で、ルーマニアのロマの若い女性とロマではない若い女性が国に戻ってコミュニティの中でどうやって正直な対話を促進するかを話し合ったり、異なるアフリカの国からヨーロッパに移民した男性二人が協力して何かプロジェクトができないか模索したり、単に学ぶだけではなく実践につながるプログラムで、最後はみんながとても優しい気持ちになったことが感じられました。特に例年と違っていたのは、連絡リストを作り、これからも連絡を取り合うことにしたところです。一対一のレベルではなく、同じ経験をした人たちがコミュニティとして今後も連絡を取り合い、助け合うのはとても大事だと思いました。

アジア太平洋青年会議 (APYC)in オーストラリア 2011 に参加して
〝私の今後のインスピレーション〟

海老原　真美

国や地域は違っても、参加者は皆、共通の問題を抱えていることを実感した。特に心に残ったのは、家族の問題。父親や母親との関係、家庭環境の問題、社会人でも、学生でも、どんな性格か、社会的・経済的に恵まれているかに係わらず、この問題が若者たち一人ひとりの今後の将来に暗い影を落とす可能性があることを感じた。このような暗闇に光を当て、家族の重大な問題を解決に導き、未来ある若者の心の不安を取り除くことができれば、一人ひとりがもっと輝けるだろうと思う。しかしながら、このことは若者だけの問題と考えてはいけない。次の社会を担う世代を明るく照らすことは、社会全体を明るく照らすことにもつながる。世代を超えた家族問題の解決の糸口は、若者の心の癒しから始まるのかもしれない。その点においても、この APYC のもつ意義は大きいと言えよう。アジア・太平洋地域の若者一人ひとりの心が平和で満たされていなければ、未来におけるこの地域全体の真の平和は訪れないと言わざるを得ないからだ。



東日本大震災義援金集まる　総額 1,314,938 円

2011 年 5 月 31 日までに、イギリス、ドイツ、スイス、スリランカ、韓国等、内外合わせ 1,314,938 円の義援金が寄せられました。皆様のご厚意を改めて心よりお礼申し上げます。この義援金は、相馬市・南相馬市の救援活動を行っている相馬救援隊に渡されました。代表の相馬行胤氏からの感謝の手紙によると、義援金は学校の教材、市民への物資に加えて、「相馬野馬追」という地元に千年以上伝わる文化継承に必要な馬の厩舎の建設や飼料、その他 20km 圏内の移動できない動物たちを生かすための活動にも充てているそうです。故相馬雪香さんの甥御さんである相馬行胤氏の心意気にこれからも皆様のご支援をお願い致します。

〈入会のご案内〉



▲ IC ハウス（東京都世田谷区）

平和はあなたの心から　静かになって心の声を聴こう
怒りや憎しみを超えて　人を思いやる心を育てよう
一人ひとりの心から　世界の平和が生まれる

当協会は、皆様からの会費及び寄付金により運営されています。内外の未来を担う青年達の交流や育成に携わり世界の平和を求める活動に是非ご支援下さいますようお願い致します。

○正会員（議決権を行使できます）
個人会員　年額　6,000 円
法人会員　年額 50,000 円
○賛助会員
個人会員　年額　3,000 円以上
法人会員　年額　50,000 円（一口）以上

会費・寄付金の振込先
1. ゆうちょ銀行
郵便振替口座番号　00180-0-38289
口座名　社団法人 国際 IC 日本協会

2. みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金
口座番号　162-4945790
口座名　社団法人国際 IC 日本協会

@編集後記　地震・台風・洪水等近年稀に見る災害の多い年のように感じますが、震災のせいにするのではなく自分がいかにチェンジして乗り越えられるか…なのではないでしょうか。皆様からのご意見をお待ちしております。広報委員：海老原真美、岡本さくら、高橋久子、長野清志、宮本由紀子、弓場睦